表紙の言葉

本ビジョンの表紙や巻末などに掲載している画像は、ビジョン策定のためのセミナーやワークショップなどに関わっていた高校生と大学生がコラージュ[注1]作品として制作したものです。令和6（2024）年12月1日に、講師に生井亮司（なまいりょうじ）先生（豊田地区在住・武蔵野大学教育学部教授）を迎え制作ワークショップを開催し、コラージュには、市の古い写真や、風土性調査の現地調査（踏査）で撮影した写真、当日参加者が市役所近辺を歩いて撮影した写真などを素材として用いています。3つの作品について、制作者が込めたメッセージを紹介します。

【表紙に掲載】タイトル：
「小山の歴史を紡ぐ人々」

小山の人々の活力あふれる生活を写した、数十年前の写真を背景に、現代の市で撮影した素材で「人」の文字が浮かび上がるようにコラージュしました。この作品をよく見ると人々の表情が本当に豊かで、写真からストーリーを想像することができそうです。当時の人々の生活の上に私たちの今があることを感じさせるような作品となりました。市に住む現代の私たちも、歴史を紡ぐメンバーの一員だということを意識したいという想いを込めて制作しました。（文：制作チーム代表・白岩大夢（しらいわだいむ））

【P1に掲載】タイトル：
「移ろう小山の景色」

時代の流れに伴って、どんな地域でもまち並みは変わっていきます。この作品は市の時代に伴う景色の変遷を表しています。作品の左から右に向かって、時が流れるようにコラージュしました。そのため写真がモノクロからカラーに変わるようにグラデーションされています。作品のセンターにはコウノトリを据えて、以前も現在も市の自然が雄大で維持されたものだということを示しています。時の流れは止められませんが、いつの時代も守らなくてはならない自然や景色が市にあるということを心にとどめておきたいです。（文：制作チーム代表・白岩大夢）

【P204に掲載】タイトル：
「継往開来（じゅうおうかいらい）[注2]～未来に向かって、つなぎ、築く、ウェルビーイングな小山市～」

この作品は、地域の歴史や人々の営みをコウノトリの姿で表現しており、30年後の市が自然と調和しさらに豊かで活気ある場所になっていてほしいというメッセージが込められています。コウノトリは『幸せを運ぶ鳥』ともいわれ、小山市の人々や地域、時代をつなぐ存在として、未来へ羽ばたいていく様子を表現しました。また、小山市のこどもたちを日本全国や世界に羽ばたいていけるような人材に育成し、飛び立ってもいつか必ず戻ってきたいと思えるような市であってほしいという思いも込められています。背景の青空には小山市各地で撮影した空の写真を素材として用い、無限の可能性と明るい未来を示しています。（文：制作チーム代表・柏崎美貴（かしわざきみき））

【P205の写真について】
2020年に渡良瀬遊水地で誕生したコウノトリのヒナ「ゆう」（写真左）と「わたる」。撮影は写真家／堀内洋助（ほりうちようすけ）氏。

（注1）コラージュ：様々な素材を組み合わせて画面に貼り付ける、絵画制作の技法の1つ。
（注2）継往開来：先人たちが行ってきたことを継承し、それを発展させながら未来を切り開いていくこと。

第1章　「田園環境都市おやまビジョン」について

第1節　ビジョン策定の目的と位置付け
第2節　ビジョン策定に向けた体制と取組み

第1章では、令和3（2021）年に持続可能な田園環境都市を目指して開催された「第20回全国菜の花サミットin小山」のための生井地区の風土性調査を先行調査として、令和4（2022）年度から3年をかけて実施してきた「田園環境都市おやまビジョン」策定事業について、第1節でビジョンの目的と小山市政での体制と取組み内容について説明します。

第 1 節 ｜ ビジョン策定の目的と位置付け

ここでは、巻頭言の内容を踏まえながら、ビジョン策定の目的と、その位置付けについてあらためて記述します。

1 ｜ ビジョン策定の目的

田園環境都市おやまビジョンの策定の目的は、全ての市民のより良い暮らしの実現、すなわち今を生きる私たちも、未来を生きる次世代の人たちも、安心して暮らし、自分が思い描く幸福な生活を営むことができるような本市を築いていくために、様々な計画や取組みを興していく際のよりどころとなる、将来の方向性を明らかにすることです。

30 年後に田園環境都市おやまビジョンという大きな旗を立て、こうありたい／こうあるべきという未来の姿を描くことで、そこに向かって、市民、事業者、行政の、それぞれが成し遂げたいこと・成し遂げるべきことが明確になり、連携や協働の望ましい在り方も見えてきます。また、市民が、行政の取組みについてビジョン実現への道程から外れていないかを確認することが容易になります。

市は平成 4（1992）年に平成 32（2020）年を展望年次とする小山市超長期ビジョンを策定した以降、おおむね 10 年ごとに長期ビジョンを策定し、まちづくりを進めてきました。平成 16（2004）年に策定した長期ビジョンは、平成 32（2020）年を展望し、平成 26（2014）年に策定した第 2 次長期ビジョンでは、平成 42（2030）年の望ましい姿を描いています。第 2 次長期ビジョンにおいては、社会経済情勢の変化などを踏まえ、おおむね 10 年後に見直しを行うこととしていました。そして 10 年目を迎えた現在、人口減少や少子高齢化、気候変動、災害の激甚化、都市部への人口の一極集中と田園部の衰退など、当時の予測を上回るほど加速度的に進む課題に直面し、新たな施策に取り組む必要に迫られている自治体は少なくなく、本市もまた同様であるものです。

また、第 2 次長期ビジョンの検証を行ったところ、多くの項目において施策事業が「実施中」であり、今後の方向性については「現状維持」および「拡大」が多くを占めていました。しかし、それぞれを詳しく掘り下げてみると、この 10 年間で変化する行政課題に合わせて施策・事業のスピードと方向性を修正しながら取り組んできたもので、短期・中期的課題の対応を重視するあまり、進むべき長期的方向性の意識は薄まり形骸化しつつありました。このようなことから、時代の潮流や新たな行政課題への対応を鑑み、あらためてあるべき未来の姿に向かうための新たな長期ビジョンを策定することとしました。

2 ｜ ビジョンの位置付け

田園環境都市おやまビジョンは、市制 100 周年を迎える 2054 年（30 年後）の市のあるべき姿を描くものです。市政運営の最上位計画である小山市総合計画をはじめとする各計画は、描いたビジョン（目標）から逆算して計画を立て、ビジョンの実現に向けて実行していきます。また、行政だけでなく、全ての市民が関わるビジョンとし、市民一人ひとりのウェルビーイングの実現を目指します。

（P16 に位置付けを示す模式図を掲載）

第 2 節 ｜ ビジョン策定に向けた体制と取組み

ビジョンを策定していくうえでの手法や進め方において大切にしたことが 2 つあります。一つは、市民と行政が主体となり、専門家の協力を得ながら協働してビジョンをつくること、もう一つは、「調べる・共有する・学び合う・語り合う」という 4 つの取組みを連関させながら内容をつくりあげていくことです。

1 ｜ ビジョン策定の体制

1.「おやま市民ビジョン会議」、庁内プロジェクトチームの設置

巻頭言と第 1 節で述べたとおり、田園環境都市おやまビジョンは、全ての市民のより良い暮らし（ウェルビーイング）を目指すものです。そのため、策定に当たっては市民・行政双方がそれぞれ意見を出し合い、対話しながら共通の将来像を見出していく必要がありました。そこで、官民協働で取組みを進めるための体制として、依頼や公募により選出された市民と、担当課や関連部署の職員からなる「おやま市民ビジョン会議」（以下ビジョン会議）を設置しました。

ビジョン会議では月に一度定例会議を開催し、直接市民と行政とが意見を交わしました。また、必要な知識を学ぶセミナーやより広く意見を聴取するためのワークショップ、得られた成果を共有する報告会など、ビジョン策定に向けた様々な取組みを行いました。加えてビジョン会議の SNS アカウントを開設し、イベントや会議の様子を広報することでビジョンの周知を図るなど、官民がそれぞれの長所を生かしながら活動を行いました。

さらに、市民の多様な意見を多角的視点で捉えビジョンに反映させるために、横断的な市職員によるプロジェクトチームを設置しました。

2. 地区別ビジョン、行政分野別ビジョンの策定作業体制

地区別ビジョンについては、ビジョン会議委員と庁内プロジェクトチームが共に策定作業を行い、行政分野別ビジョンについては、庁内プロジェクトチームを中心として検討を行い、ビジョン会議委員が策定作業をサポートしました。

2 ｜ ビジョン策定のための取組み

1.「調べる」「共有する」取組み

ビジョンの策定に当たっては、市の望ましい未来の姿を描いていくためにまず必要なことは、私たちが暮らすまちの過去、先人たちがどのような営みを重ねてきたかを知ること、そして、現在のまちで起きていることと、それに対する市民の意識をできるだけ細やかに把握することであると考えました。過去においても現在においても、人間が暮らしや生業の営みを通して、その土地の自然に働きかけ、その結果として、それぞれの土地の姿が形作られ、その姿は時代によって変遷し、私たちの目の前には風景として立ち現れてきます。その土地の自然の様子、人間と自然の関わり、それによって生まれる産業や文化、祭り、コミュニティ、人々の価値観や意識などを総合的に捉えたものを「風土」と呼ぶことができ、そこから地域の持続可能なまちづくりを考えていくことが可能になります。

「調べる」取組みにおいては、その風土を、巻頭言で述べたようにそれぞれに特性がある地区ごとに把握していく取組みを「風土性調査」と呼び、いくつかの調査手法を組み合わせて行いました。また、地区ごとの調査で見えてくる解決したい困りごとなどにおいては、市民や地区の努力だけでは解決が難しいこと、市共通のこととして浮かび

上がることもあり、そのような課題に対して行政の立ち位置から市民意識を把握するために、行政分野別市民アンケートを実施しました。

1-1. 風土性調査の実施

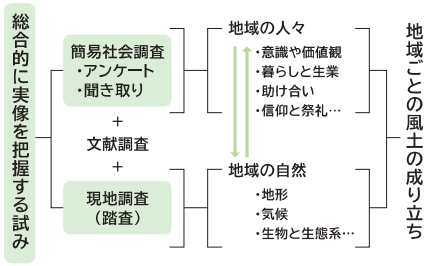
風土性調査は、市を地域の特性や成り立ちから全 11 地区に分け、令和 3（2021）年度に先行調査を行った生井地区に続き、他 10 地区（豊田、小山、大谷北部・中部、大谷南部、桑、絹、間々田、寒川、中、穂積）については、令和 4（2022）年度から令和 6（2024）年度までの 3 年間で、各地区おおよそ 3カ月程度の調査期間を設け実施しました。

調査内容｜次の 4 つの手法を組み合わせて調査しました。①専門地域調査士の資格を持つ調査員が現地を歩いて行う現地調査(踏査)　②アンケート調査（小山、大谷北部・中部、桑、間々田地区は無作為抽出による郵送で実施、それ以外は市の広報配布時に公民館と自治会を通しての配布と回収で実施）　③聞き取り調査（グループインタビュー：自治会役員、子育て世代、農業者という属性による 3 回を基本に、各地区 3 から 5 つのグループで実施。個別聞き取り：必要だと思われた事案について個別に聞き取り）　④以上の調査成果に関連して事実関係などについて調べる文献調査

調査成果｜調査終了後は、その成果を住民の方々と共有するため、各地区の公民館や市民交流センターにおいて「共有する取組み」として、報告会を行いました。地区ごとに以下の 4 種の成果物にまとめ、ウェブサイトで公開する他、各地区の公民館などに地区住民の方々が閲覧できるように設置しました。①現地調査（踏査）による図版集　②アンケート集計結果報告書　③基礎資料（4 つの調査成果の総合的なまとめ）④概要版（基礎資料から重要事項を抜き出し 12 ページの冊子にまとめたもの）

また、ビジョン素案づくりに生かすために、ビジョン会議委員や庁内プロジェクトメンバーにも適宜報告・共有しました。

地域を総合的に把握する風土性調査の全体像



1-2. 行政分野別市民アンケートの実施

地域的な特色だけでなく、市全域に関わる行政分野別の視点からも市の未来ビジョンを考えるため、令和 5（2023）年 10 月から令和 6（2024）年 2 月にかけて行政分野別市民アンケートを実施しました。市民もしくは市に通勤・通学している方や興味関心のある方を対象に、紙媒体の調査票及びウェブアンケートにリンクする 2 次元コードを設置・配布し、延べ 13,756 件の回答をいただきました。アンケートは「大項目（市域全体に関わること）」と以下の 10 分野について実施しました。①生涯学習・文化・スポーツ　②福祉・医療・健康・介護　③教育・子育て　④農業・自然　⑤商工業　⑥コミュニティ・多文化共生　⑦防犯・防災　⑧まちづくり　⑨交通環境・公共施設　⑩関係人口・行政運営

2.「学び合う」取組み

ビジョンの策定に必要となる基本的な知識や最新の知見を学び理解するため、令和 4（2022）年度には庁内職員に向けたケーススタディ（勉強会）として、また、令和 5（2023）年度からは市民と職員とが共に学ぶ「おやま市民ビジョン会議シリーズ　～学び合うセミナー～」として市民の参加も募りながらセミナーを開催しました。SDGsや豊かさの指標、脱炭素社会に向けた取組みなど、30 年後の未来を考えるうえで欠かすことのできないテーマ（題材）について、専門の知識を持つ方々によるレクチャーを受けました。映像アーカイブは、市 YouTube チャンネルで公開し、また、参加者のアンケートに記載された感想や意見も含め、詳細なレポートをウェブマガジン「おやまアサッテ広場」に掲載し、ビジョンづくりの大切な成果として共有しました。（実施内容については、P195 に一覧を記載）

3.「語り合う」取組み

「調べる」「学び合う」過程で得た知見を基に、様々な立場の人が話し合う機会を創出するため、テーマを設定したワークショップ、地区住民が合同で集まる地区合同ワークショップ、地区ごとの風土性調査報告会、また、前年度の成果について報告し意見を募る全体報告会を開催しました。ワークショップのテーマは、調査の中で出た課題や、学び合うセミナーやビジョン会議の場で得られた知見から抽出・設定しました。そのうえで、各人が自分の考えを語り、また自分と立場や考えが異なる人の意見を聞く過程で、一方の視点だけでは得られないアイデアや気付けない問題に気付き、これまでの取組みから得られた知見をさらに深化させながら、その成果を、ビジョンづくりの素材としました。（実施内容については、P195 に一覧を記載）

4. その他の取組み

可能な限り多くの市民の声を聴き、ビジョンに反映させるため、その他にも様々な取組みにおいて「30年後の小山市」をテーマに意見の収集を行いました。

市民フォーラム｜特定のテーマについて、様々な立場の市民が自由に意見を述べる機会として、年に数回開催しています。その中で、令和 5（2023）年度はビジョン策定に向け、「2054 年の小山市を語ろう」を大きなテーマに、30 年後の 2054 年の市について、「交通環境・公共施設」「コミュニティ（自治会）・多文化共生」「少子化・子育て・教育」「関係人口・U ターン」「農業・自然」「健康・医療・介護」「文化・生涯学習」の 7 つのテーマごとにグループをつくり話し合いました。

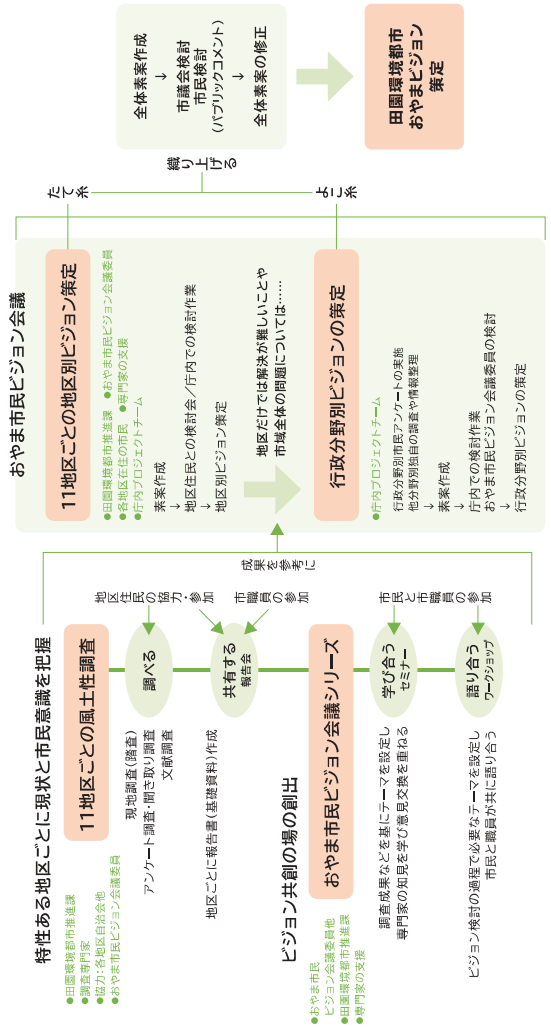
小山市民討議会 2023｜小山市青年会議所が主催となり、年に 1 回市民の中から無作為で選出された対象者に案内を送り、テーマに沿って市民間で討論を行い、市政への意見書を作成しており、令和 5（2023）年度は「田園環境都市おやま」をテーマに実施しました。

おやまアサッテ広場｜ビジョン策定の取組みを広く周知するため、令和 4（2022）年 8 月からまちづくり進行形ウェブマガジン「おやまアサッテ広場」を開設しました。市民が市の魅力を紹介する記事や、白鷗大学地域メディア実践ゼミと連携し、未来の視点から市を描く記事を掲載しながら、ビジョンについて周知し、同時に市民が自分ごととしてビジョンを身近に捉えられるよう、様々なコンテンツを公開しています。

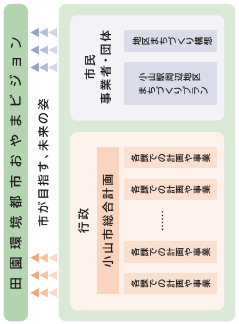
包括連携協定意見交換会｜令和 5（2023）年度に、ビジョンが市に関わる全ての市民のウェルビーイングの実現に向けて策定されるよう、市と包括連携協定を結ぶ企業・団体から、作成過程にあるビジョンの趣旨について理解いただき、それぞれの視点から意見をうかがいました。

風土性調査と行政分野別市民アンケートの実施時期やアンケート回収率などについては、巻末資料集に記載しています。

体制と取組み：ビジョン策定までのプロセス



田園環境都市おやまビジョンと他計画などとの関係



第2章 ビジョンの基盤とするもの ～自然の恵みを将来にわたって保つこと

第１節 ｜ ビジョンの基盤とする自然の恵み（生態系サービス）
第２節 ｜ 自然の恵みを保つために（環境容量への留意）

この章の目的は、全ての市民のより良い暮らし（ウェルビーイング）の実現が、豊かな自然の恵み（生態系サービス）に支えられることを確認し、ビジョンにしっかりと位置付けることにあります。第１節では、人間の社会経済活動が自然の恵みに基づいていることを説明します。第２節では、自然の恵みをより豊かに、将来にわたって受け続けるために、まず市域における自然の恵みについて風土性調査の結果から考察し、次に自然の恵みを受けるにも限りがあり、これを自然の恵みの限度（環境容量）と呼ぶことに触れます。以上のように、この章では、自然の恵みがビジョンの基盤となることを確認し、市域全体の自然を保持、回復して将来に引き継いでいくことが全ての市民のウェルビーイングの実現を目指すための基本条件となることを述べます。